

「丹波篠山山の芋」省力化技術の取組について

「丹波篠山山の芋」は長い歴史を誇る特産物であるが、生産者の高齢化に伴い、栽培面積、生産量の減少が続いている。丹波農業改良普及センターでは、丹波篠山市、JA丹波ささやま、北部農業技術センターと連携しながら、産地復権に向けた生産力強化の取組の一つとして、省力化技術の普及を進めている。

取組の背景

丹波篠山山の芋の栽培面積は、需要があるものの、労働力不足等により、2008年の71haから2018年の36haと減少が著しい。

そこで、需要に対応できる産地規模を維持・拡大していくため、2017年度に市、JAと丹波県民局で「丹波篠山ブランド産品戦略会議」を立ち上げ、生産力強化の取組の一つとして、北部農業技術センターと連携して、省力化技術の普及を進めている。

取組内容及び結果

省力化技術として、2017年度から県民局・市事業を活用しながら、移植機、拍動灌水装置、掘取機（写真）などの導入を進めている。

2018年度は、北部農業技術センターと連携しながら、日射制御型拍動灌水装置（日射量に応じて自動的に灌水を行うことで、品質も向上する）の導入を進めた結果、2台が新たに導入された。

また、収穫は、芋の表皮が傷つきやすいことから手掘りが一般的だが、一部の大規模栽培農家で

は掘取機が導入されている。「JA山の芋部会」の現地講習会で、掘取機による収穫作業の実演を行った結果、1台が新たに導入された。

新たな試みとして、抑草や土壌の乾燥防止のために、畝から谷まで覆うための稲わらの確保を効率的に行うため、市内の大規模栽培農家が行っているロールベラーを使い、切りわらをロール状にする方法を実演したところ、多くの参加者が高い関心を示した。

過去2カ年の技術導入状況は表のとおり。

今後の方針

引き続き省力化技術の導入を進めるとともに、新たに種芋を小丸種芋として大量に増殖させる方法についても、戦略会議及び北部農業技術センターと連携しながら現地実証を重ね、安定的に供給していく体制を確立し、生産力強化につなげていきたい。

大上 真貴子（丹波農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：0795-73-3808）



写真 掘取機を用いた収穫作業

表 県民局・市事業を活用した機械導入状況

導入年度	機械・台数
2017年	成形機4台、溝掘機2台、移植機1台 灌水装置1台、掘取機3台
2018年	溝掘機1台、成形機1台、拍動灌水装置2台、灌水装置2台、掘取機1台